

瀬良英介の一般業界向け

飼料・畜産トピックス（227）

2010年3月

（227）カナダ酪農家のヨーネ病への関心度と対応

ヨーネ病はパラ結核菌症とも呼ばれていますが、乳牛などの若い反芻動物に経口感染し、長期間の潜伏期間を経て生体の抵抗が下がり発病し、生産性が著しく低下する疾病です。カナダでは酪農家の約3割が少なくともヨーネ病陽性の牛を二頭飼っているという報告があります。また、米国では環境サンプルなどから牛群の68%がヨーネ病に陽性であるとした予測値があります。ヨーネ病自体は大きな問題を直ぐに提起する疾病ではないのですが、慢性的、且つ、潜在的な生産性の低下が認められています。例えば、炎症、乳生産量の低下、何らかの疾病にかかり易い、早期に淘汰しなくてはならない状況になるなどです。

パラ結核、或いは、ヨーネ病の病原菌は判っています。それはマイコバクテリウム・エヴィウム ssp. パラチュバキュローシス（俗にMAPと呼ばれています = *Mycobacterium avium* ssp. *Paratuberculosis*）によって引き起こされます。

カナダや米国の酪農産業がヨーネ病について関心を持ってもらいたい理由には消費者が慢性的な疾病であっても何らかの理由で牛乳、乳製品、或いは、牛肉製品の購買を控えるようになっては困るということがあります。もう一つの理由は、MAPとの関係が明確でないにしろ人間の難病、クローン病を引き起こすのではないか、という恐怖心から牛乳、乳製品、牛肉製品を避けるようにならないとも限らないという点です。

上記のような理由からカナダの酪農産業界としては酪農家に対してもヨーネ病の原因であるパラ結核菌を出来るだけ農場内部でコントロールするような実行しやすい実践的な方法を推奨しています。

確かに、かなりの数の牛は潜在的にはマイコバクテリウム・エヴィウム ssp. パラチュバキュローシスにおかされており、牛は病原菌を糞、牛乳、初乳などを介してばら撒きます。ましてや分娩ともなると回りの子牛にも感染の危険が広がります。残念ながら、現在のところ、潜在的に感染している子牛や牛を簡便法で調べる検査の精度はかなり低いのです。

カナダの調査は法律で縛って行うものではありませんから、強制力はありません。ヨーネ病とリスク・アセスメントで予防対策に興味を持った酪農家に電話依頼で要請し、具体的な方法で出来るところだけでもやって欲しいとお願いするのです。勿論、賛成する農家はELISA法に

より牛群のヨーネ病の有無を調べることに同意します。2007年にカナダのオンタリオ州（180戸）、マニトバ州（14戸）、サスカッチワン州（10戸）、アルバータ州（17戸）、及び、ブリティッシュ・コロンビア州（17戸）で、計238戸の酪農家が参加を表明しました。調査牛群の平均搾乳頭数は60頭で幅は13頭から352頭の搾乳牛でした。調査当時の305日産乳量は9,528kg±1,278kgでした。

調査に参加した酪農家の72%+(172戸)がヨーネ病は現在農場で問題になっていない、と答えています。農家によっては過去にはヨーネ病が問題だったが今では問題ではない、と指摘した農家もいます。

それでは何故、ヨーネ病に関心があり、ヨーネ病対策プログラムに参加したのかを問うと、121戸の農家はヨーネ病と人間の難病、クローン病とMAPのつながりについて消費者がどのように感じ始めているかという点に関心があり、また、事と次第によっては酪農産業そのものに多大なマイナスの影響を与えかねない、という点に関心があると答えています。

農場の現場で獣医も推奨しているのは次の11項目ですが、1～3項目までが酪農家が普通に一番実行しているものです。

- (1) 生れ落ちの子牛は出来るだけ早く分娩房から1頭づつのペンかハッチに移す
或いは、分娩房の中で母牛から離し、分娩房の中にミニペンを置いて入れる
- (2) リスクの低い初乳を初産、二産の牛から集め、ヨーネ病検査陰性の牛から集める
- (3) 牛乳ELISA試験を受けていなかった乾乳牛や乳牛の血液検査は行う
- (4) リスクの低いミルクを子牛に与える
- (5) 個々の子牛にもっと初乳を与えるようにする
- (6) 販売出来ない牛乳を子牛に与えない（破棄処分の牛乳、高SCC牛乳「高体細胞牛乳」、分娩直後の初乳や牛乳でも抗生剤などで治療した期間のもの）
- (7) 子牛用のミルク・バケツやボトルは毎日石鹼と水で洗う
- (8) ヨーネ病検査陽性の子牛や乳牛は全て識別できるようにマークなどをつける
- (9) それぞれの子牛にはミルク用のバケツやボトルを個々に与える（番号をつける）
- (10) 子牛のペンや飼料の上を糞のついたブーツで歩かない
- (11) ヨーネ病陽性の牛を分娩させる分娩房は、ヨーネ病陰性の牛を分娩させる分娩房から分ける

この報告は論文9枚、表4点からなる報告ですが、カナダのゲルフ大学、オンタリオ農業省、サスカチワンの西部獣医大学、米国ミネソタ州のミネソタ大学獣医医薬部の研究者6名が発表しています。詳細に関心のある方は最新の米国酪農学会誌（J. Dairy Sci. 93:1491-1499）を参照な

さることをお勧めします。

余談ですが、日本でもヨーネ病、そしてマイコバクテリウム・エイヴィウム・パラチュバキ
ュローシス（MAP）については関係者の間では知られています。ただ、カナダの酪農家が指摘
するように、もしMAPと人間の難病、クローン病との因果関係があるかもしれないという点に
消費者の注目が注がれると酪農産業は打撃を蒙ります。日本の場合は、残念ながらそのような点
を拡大して興味本位、且つ、不用意に取り上げるマスメディアや評論家が出現しやすい下地があ
ります。日本の場合はカナダや米国の酪農産業界が懸念するよりもはるかに難しい問題が起きる
ことは必至でしょう。残念ながら日本の消費者の一部にはパラノイアとしか思えない反応を示す
人たちがおり、また、それに迎合する評論家やマスメディアが多いので、非常に残念ながら一般
大衆はどちらにでも引きずられます。無駄になった新型インフルエンザ・ワクチンの膨大な輸入
量一つを捉えても判ることです（瀬良、2010）。